

論文要旨

障害のある子どもの就学に関する研究 —当事者のライフストーリーの社会構築主義的分析—

佐 藤 智 恵

広島大学大学院教育学研究科

2015 年

I. 論文構成

第1章 問題背景の所在

- 第1節 問題の所在
- 第2節 先行研究の検討
- 第3節 研究目的

第2章 研究の方法

- 第1節 研究方法と理論的背景
 - 第1項 研究方法
 - 第2項 理論的背景
- 第2節 インタビュー対象者の選定と研究協力依頼の経緯
- 第3節 インタビュー対象者
 - 第1項 ユウキ君家族の居住するX市
 - 第2項 ユウキ君（仮名）：小学2年生の男児
 - 第3項 吉田サチコさん（仮名）：ユウキ君の母親
 - 第4項 坂本マユミさん（仮名）：ユウキ君の保育所年長組担任
 - 第5項 藤岡ミドリさん（仮名）：ユウキ君の小学校1年次特別支援学級担任
 - 第6項 「私」：聞き手
- 第4節 分析方法
 - 第1項 データ収集方法
 - 第2項 分析方法

第3章 ユウキ君にとっての小学校への就学の経験

- 第1節 インタビューまでのユウキ君とのやりとり
- 第2節 ユウキ君の小学校就学の経験
- 第3節 ユウキ君の経験した就学に関する考察
- 第4節 小括

第4章 サチコさんが経験したユウキ君の小学校への就学

- 第1節 インタビューまでのサチコさんとのやりとり
- 第2節 I期：年長児12月まで
- 第3節 II期：年長児1月～3月
- 第4節 III期：1年生4月～6月
- 第5節 IV期：1年生6月～
- 第6節 V期：1年生7月～
- 第7節 VI期：1年次3学期
- 第8節 サチコさんが経験した就学への考察
- 第9節 小括

第5章 坂本マユミさんが経験したユウキ君の小学校への就学

- 第1節 インタビューまでのマユミさんとのやりとり
- 第2節 マユミさんの小学校就学に関する考え方やこれまでの経験
- 第3節 I期：年長児12月まで
- 第4節 II期：年長児1月～3月
- 第5節 III期以降
- 第6節 マユミさんの経験した就学への考察
- 第7節 小括

第6章 藤岡ミドリさんが経験したユウキ君の小学校への就学

- 第1節 インタビューまでのミドリさんとのやりとり
- 第2節 ミドリさんの小学校就学に関する考え方やこれまでの経験
- 第3節 I期：年長児12月まで
- 第4節 II期：年長児1月～3月
- 第5節 III期：1年生4月～6月
- 第6節 IV期：1年生6月～
- 第7節 V期：1年生7月～
- 第8節 VI期：1年生3学期
- 第9節 ミドリさんの経験した就学への考察
- 第10節 小括

第7章 総合考察

- 第1節 就学における3点の課題へのまとめ
- 第2節 当事者の就学の経験
- 第3節 ドミナント・ストーリーとそれぞれのモデルストーリー
- 第4節 就学に関する当事者の語りを併せた検討
- 第5節 インタビューにおける当事者と「私」の間の相互行為の検討
- 第6節 本研究の成果と限界性

引用文献

謝辞

II. 論文要旨

第1章 問題背景の所在

小学校への就学は、子どもや母親にとって、場所、生活の流れや周囲の人的環境など大きな変化を伴う出来事であり、小学生になる喜びや嬉しさとともに、変化に伴う不安や戸惑いを感じている子どもの姿が想像できる。それは、障害のある子どもも同様に、加えてそれぞれの障害から生起するその子ならではの困難さを抱えながら小学生になっていくと言える。

特別な支援の必要な子どもの就学に関しては、2007(平成19)年、学校教育法施行令の改正により、保護者の意向聴取が義務づけられた。保護者の意向を重視するなど制度としては変化を打ち出しているものの、実際には子どもの適切な就学先の選定となっていない現状や、保護者が就学先選択に不安を抱えていることが報告されている(姉崎ら,2007;伊豆蔵ら,2008)。また、障害のある子どもの就学にかかわる保育者と小学校教諭では、子ども観や意識に違いがあり、その意識が就学時の連携を困難にしている実態などが指摘されている(本杉,2014)。実際の就学においては、子ども観などのずれは当事者には意識化されることがないために、就学の困難さをより深化していると考えられる。このような就学における困難さに対し、スムーズな就学を目指して就学支援シートなど様々なツールの検討がなされている(山本ら,2012;松井,2007)。

先行研究より、障害のある子どもの就学の課題についてまとめると、まず第1に、保護者に就学後の学校生活へのイメージがなく就学してから問題が顕在化する、次に、保育者と小学校教諭の間で子ども観や発達観が異なるため連携がとりにくい、第3に就学支援ツールの利用が奨励化されることで逆に就学が困難さを示す、ということが挙げられる。

障害のある子どもの就学に関する先行研究では、保護者、保育者、小学校教諭のいずれかを対象としたものがほとんどであるが、障害のない子どもの就学については、子ども、保護者、保育者・小学校教諭という就学に関わる全ての人の視点を併せた検討が行われ、個人の考えを探索することだけでは知りえない、就学に関わる当事者の意識の差異などが明らかにされている(Peters,2000;Podmoreら,2003;Duncan,2005)。

そこで本研究では、障害のある子どもの就学において、子どもの就学に関わったすべての当事者を対象とし、それぞれの就学に関する語りにも生活背景を併せて分析を行う。そして、障害のある子どもの就学における当事者の意識や、社会の中で自明化された就学の事象を明らかにするとともに、現在の障害のある子どもの就学における3点の課題から新たな知見を得ることを目的とする。

第2章 研究の方法

本研究では、ある1名の子どもの就学に関わった保護者、保育者、小学校教諭、子どもを対象とする。当事者の就学の経験から、障害のある子どもの就学で自明化されている事象を明らかにするという研究目的に対し、これまであまり主題化されてこなかった問題や人々を対象とする際に有効であり、個人の主観的な現実を把握できるところに特徴を持つライフストーリー法を用いる。

当事者のライフストーリーを分析する際の理論的背景として、社会構築主義の立場を採用

する。バー(1997)は、社会構築主義的アプローチを「自明の知識への批判的スタンス」であると述べ、ハッキング(2006)は、社会構築主義的アプローチを使用することにより、自明とされている概念が、実際には社会情勢の偶然的な構築物であることを明らかにすると指摘している。本研究では、社会構築主義による分析を行うことで、障害のある子どもの就学の中に潜んでいる自明化された常識が浮かび上がると考えこの方法論を用いる。

本研究の対象者は、ユウキ君（仮名：小学校2年生の男児、3歳で広汎性発達障害との診断を受けている）、吉田サチコさん（仮名：母親）、坂本マユミさん（仮名：ユウキ君の保育所年長クラス担任保育者）、藤岡ミドリさん（仮名：ユウキ君の小学校特別支援学級1年次の担任教諭）の4名である。

インタビューでは、ユウキ君の就学に関する事、その人の保育や子育て、教育における経験、障害児とのかかわりなどについて、筆者との対話の中で語りの聞き取りを行った。母親へのインタビューは20XX年9月～20XX+1年6月までの間に計250分、母親の自宅にて実施した。ユウキ君は、20XX年8月～9月に計240分遊びながらユウキ君の自宅で話を聞いた。保育者には20XX年9月～20XX+1年2月までの間に計150分、勤務先のA保育所の応接室で、小学校教諭には、20XX年9月に計90分のインタビューを、勤務先B小学校の校長室にて行った。それぞれの対話は、対象者の許可をとりICレコーダーに採録し、トランスクリプトを作成した。また、論文の公開について、それぞれの対象者から許可が得られている。社会的現実、人々の相互行為の中で構成されるとする社会構築主義の観点より、当事者の経験したユウキ君の就学、生活上の出来事、子育て観や保育観、教育観、障害に関する考え方などから検討を行う。

第3章 ユウキ君にとっての小学校への就学

ユウキ君には、過度に緊張を感じる事が無いように、遊びながらインタビューを行った。また、ユウキ君の語りの検討からだけでなく、保育所で制作した作品、小学校1年次に学校で学習したプリント、ノートなども含めて分析を行った。

ユウキ君の就学は、6月以降に激しい登校渋りが見られたことで困難な側面が際立つものとなった。特別支援学級には同級生が在籍しておらず、友達と呼べる存在がいないなど、保育所から小学校特別支援学級への就学という環境の変化に対する戸惑いがあったことが明らかとなった。ユウキ君は、1年以上前の保育所時代に関しては、友達と遊んだことなど記憶に残っている出来事を語ったが、就学後の学校生活については自ら語ることはなく、「小学校は、学習のみで楽しくない」という内容の語りが見られた。一方、1年次に学習したノートやプリントには、登校渋りの出現後も、丁寧で力強い筆跡の文字が並び、熱心に学習に取り組んでいた跡があり、授業内容にも十分な理解が見受けられた。他の当事者からは登校渋りという困難さから語られることの多いユウキ君の就学であったが、ユウキ君自身の語りや学習の様子からは、登校渋りという現象だけでは語れない、就学後の学習や生活に真摯に向き合おうとする側面が明らかになった。

第4章 吉田サチコさん(母親)にとっての小学校就学

母親であるサチコさんからは、入念な準備をしたがスムーズな就学とならなかったこと、保育者のマユミさんの存在が自己の子育てや子どもの就学についての助けとなっていたことが語られた。サチコさんは障害のある子どもを育てる先輩母親らの就学後の苦勞を知り、早期より就学準備を行っていた。就学先は迷ったのちに、特別支援学級を選択している。それは、自身の特別支援学級でのボランティア経験から、ユウキ君には個別に指導を受けることが必要であり、特別支援学級への就学が適していると感じたからである。

サチコさんはユウキ君に障害があると診断を受けたあと、発達障害の啓蒙活動に参加するなど、療育、医療、教育機関などに対して積極的に働きかけていた。同時にサチコさんの語りには、ユウキ君に「普通になってもらいたい」という語りが見られたり、義父母にユウキ君の障害のことを伝えていない、地域の小学校に就学したため自身の同級生に出会う機会があるが、我が子の障害を知られたくないと考えているなど、子どもに障害があることについて葛藤を抱えていたことが明らかになった。

自らは姉の行事で小学校を訪れた際、複数回に渡って特別支援学級を訪れ、担任教諭らと言葉を交わしているが、ユウキ君を特別支援学級の見学に同行させることはなく、保育者や小学校教諭もユウキ君の特別支援学級見学についての助言を行っていない。このことから、子どもが就学先の様子を知ることの重要性が、周囲の大人には認識されていないという現状が明らかとなった。

第5章 坂本マユミさん(保育者)にとっての小学校就学

本章では、マユミさんがユウキ君の就学において、障害児への保育に関する知識や経験のない自分への負い目があり、そのことがユウキ君の就学に影響を及ぼしていたことが明らかになった。

マユミさんは20年間の保育者経験から、保育実践に関しては自らの明確な保育観や子ども観を保持しており、丁寧な保育実践には、サチコさんからも大きな信頼が寄せられていた。ユウキ君の就学に関しても、就学支援シートの作成や小学校への訪問など様々な取り組みを行っていた。しかし、一度も障害児を担当したことがないことから、ユウキ君に対して適切な支援が行えなかったと語るなど、障害児保育についての経験がないことへの引け目を感じている。一方、これまでの保育経験から、障害という視点だけでは子どものことは理解できないとも考えている。ユウキ君の就学先がB小学校の特別支援学級に決定したと知り、大勢の子どもとの関わりの中で成長をしてきたユウキ君にとって、少人数の特別支援学級は就学先として適切でないと感じたものの、自らの障害への知識や経験のなさから生じた引け目から、母親に対して就学先に関するアドバイスを行えなかった。ところが就学後、ユウキ君の登校渋りを知り、母親の「A小学校にいけばよかった」という言葉を聞いたことにより、就学先について助言しなかったことへの後悔が見られた。

マユミさんにとって障害児保育や特別支援教育は、通常の保育行為とは異なる特別なスキルを駆使して取り組むべきものという意識があった。そのことについて、マユミさん自身も疑義を抱いていると思われる語りも見られたものの、特別な保育方法への疑いは、マユミさ

んに強く意識化されることはなかった。このことから、保育や幼児教育において、障害のある子どもに対する特別な保育方法があるという考え方が自明のものとして受け止められているということが考えられる。

第6章 藤岡ミドリさん(小学校教諭)にとっての小学校就学

本章では、ミドリさんにとって、母親の入念な就学準備により就学前からユウキ君の姿を把握できたことが授業準備にも有益であったことなど、ユウキ君の就学は理想的だと感じていたことが明らかになった。姉が小学校に在籍をしていたことから母親とは非公式な場で、頻繁に顔を合わせる事が可能となったことも、ユウキ君の就学にとっては効果的であったとミドリさんは感じている。ミドリさんは、ユウキ君の教育について、登校渋りが大きな課題であったとは捉えておらず、登校渋りという現象も学校生活の1つの過程として考えている。その背景として、ミドリさんは、長年障害児教育に携わっており、X市においても先進的に特別支援教育に取り組んできた中で、さまざまな困難さを抱える子どもに対しても、自らの教育上の工夫と、子どもへの愛情ある丁寧な指導や関わりを継続していくことにより、子どもの姿が変容していくという経験を蓄積してきたことが挙げられる。

第7章 総合考察

本章では、障害のある子どもの就学における課題について当事者の語りから検討し、そこから導き出された新たな知見について述べる。

1点目の、保護者に就学後の学校生活へのイメージがなく、就学してから問題が顕在化するという課題について、本研究では母親は学校生活へのイメージはあったものの、就学後に問題が出現するという結果が見られた。母親は、子どもの就学先について悩みを抱えていた。それは特別支援学級に関する具体的なイメージを保持していなかったからだと考えられる。その後、自身の特別支援学級でのボランティア経験を契機として、子どもの障害特性に合わせた指導が行われているという実際に触れたことにより、特別支援学級への就学を決定している。現在、特別支援学校や小学校でも学校見学が行われているが、特別な行事として実施するのではなく、保護者や子どもが通常の授業場面に参加できるような形態で実施することで、学びの姿を想起しやすいことが挙げられる。

2点目の課題である、保育者と小学校教諭の間で子ども観や発達観が異なるため連携がとりにくいことについては、本研究では、連携について保育者や小学校教諭から互いの子ども観などの差異について語られることはなく、この課題については明らかにはならなかった。しかし、母親の語りには保育者と小学校教諭の対応方法の違いが現出した。保育者は自らの話を聞き相談に乗ってくれる存在であったのに対し、小学校教諭は助言してくれる相手となっていたことが浮かび上がった。

3点目の就学支援ツールの利用が奨励化されることで逆に就学が困難さを示すという課題に関して、本研究でもツールが使用されたにもかかわらず、実際の就学では実体のない連携に留まっていた。対象児の就学では、母親作成の就学支援ファイルと保育者作成の就学支援シートの2つのツールが使用されていた。小学校教諭からは、支援ツールからの情報が授

業準備に活かされたことが語られている。しかし、対象児に登校渋りが見られた際に、保育者と小学校教諭の間で、問い合わせや相談は全く行われていなかった。この背景には、ツールを使用し連携を取っていたが、保育者、小学校教諭それぞれが匿名性を保ち、形式的なやりとりで終始していたことが考えられる。本研究の事例は、保育所幼稚園から小学校の就学には、単にツールを使用して効率的に情報伝達するだけでは伝わらない事象が存在することを示唆している。

本研究では、障害のある子どもの就学について、当事者の語りを併せて検討したことで、それぞれが子どもに真摯に向き合い保育・教育を実践し、入念な就学準備を行っていても、スムーズに行われない就学があったということが明らかになった。それは、これまで障害のある子どもの就学で指向されてきたスムーズな就学という視点からでは、説明することができない就学の一端である。

本研究で得られた新たな知見は、これまで指向されてきた「スムーズな就学」というものが、社会の中で生成されてきたという点である。そこには、障害のある子どもの就学において「関係機関が十分な連携を取ることでスムーズな就学となる」という自明化された常識があることが浮かび上がる。障害のある子どもの保育所幼稚園から小学校への就学には、越えることが困難な高い段差が存在している。現在の就学には、就学時の段差を「スムーズに越えねばならない」という自明化された意識があると考えられる。そしてこの「スムーズな就学」は、当事者それぞれが元来保持していた意識ではなく、就学先決定において重要な役割を担うとされる就学相談や就学指導委員会によって、長年に渡って保護者や保育者、小学校教諭に求められてきたものであろう。保護者、保育者や小学校教諭は、就学相談などの場で重視されてきた意識に規定され、就学時に子どもの躓きを防ぐための様々な手段を講じている。障害のある子どもの就学に関わる当事者は、社会によって生成された意識に縛られ、無意識のうちに「スムーズな就学」を指向しているのである。

Ⅲ. 主要引用・参考文献

- ・赤塚正一(2013) 通常の学級に在籍する発達障害のある児童の保育所・小学校間の移行支援に関する実践的研究. 特殊教育学研究, 51(3), 311-319.
- ・姉崎弘・大原喜教・藪岸加寿子・森倉千佳(2007) 特別支援教育における就学指導委員会の在り方に関する一研究: 「個別の就学支援計画」の策定・引継ぎを中心に. 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 27,57-61.
- ・バー,V.(1997)社会的構築主義への招待 言説分析とは何か. 田中一彦訳 川島書店.
- ・Duncan,J (2005) " She' s always been,what iwould think,a perfect day-care child" : Constructing the shsubjectivities of a New Zealand child. European Early Childhood Education Research Journal.13 (2), 51-61.
- ・ハッキング.I.(2006) 何が社会的に構築されるのか. 出口康夫・久米暁訳.岩波書店.
- ・伊豆蔵満世・越野和之(2008) 特別支援教育への移行期における就学指導の動向--奈良県各市町村の実態調査から. 奈良教育大学紀要 人文・社会科学,57(1), 107-121.
- ・松井剛太(2007) 障害のある幼児の就学支援システムの構築: サポートファイルの活用による小学校への接続の試み.保育学研究,45(2), 191-198.
- ・本杉和美(2014) 特別な支援を必要とする子ども達のよりよい移行支援をめざして: 幼・小連携を通して. 教育実践高度化専攻成果報告書抄録集,4,109-114.
- ・中根成寿(2010) 「私」は「あなた」にわかってほしいー「調査」と「承認」の間でー.宮内洋・好井裕明編著 当事者をめぐる社会学 調査での出会いを通して.北王路書房.
- ・西倉実季(2008) 顔にあざのある女性たち「問題経験の語り」の社会学. 生活書院.
- ・Podmore, V.N, Sauvaio, L, &Mapa, L. (2003).Sociocultural Perspectives on Transition to School from Pacific Islands Early Childhood Centres. International Journal of Years Education, 11(1), 33-42.
- ・Peters, S (2000).Multiple perspectives on continuity in early learning and transition to school. European Conference on Quality in Early Childhood Education Complexity, diversity and multiple perspectives in early childhood. London.
- ・高井俊次(2009) ことばが人に届くとき.金井壽宏・森岡正芳・高井俊次・中西眞知子(編) 語りと騙りの間ー羅生門的現実と人間のレスポンシビリティー(対応・呼応・責任).ナカニシヤ出版.
- ・渡部昭男(2008) 障がいのある子の就学・進学ガイドブック.青木書店.
- ・山田富秋(2011)対話プロセスとしてのインタビュー. フィールドワークのアポリアーエスノメソドロジーとライフストーリー. せりか書房.
- ・山田富秋(2013)インタビューにおける理解の達成. 語りが拓く地平 ライフストーリーの新展開. 山田富秋・好井裕明編 せりか書房.
- ・やまだようこ(2000) 人生を物語ることの意味. やまだようこ(編著)人生を物語る-生成のライフストーリー-.ミネルヴァ書房.
- ・山本真也・香美裕子・田村有佳梨・東川博昭・井澤信三(2012) 発達障害の疑われる幼稚園児に対する就学支援プログラムの効果の検討.特殊教育学研究,50(1),65-74.